

小谷部、森川両氏の年忌に憶う (二)

船本文治

昭和十六年九月十日付、大井元芝町の小谷部氏より、大阪姉宅に腎臓炎加療中の船本宛

「漸く秋気がさして来ました。貴君永らく病氣御養生の由でしたが、其後如何ですか。

僕の方も何かと多事で、心ならずにも御無沙汰してしまいました。

この夏は是非共南アルプスへと、予而お話しして居たのですが、駄目でしたね。

僕は八月末に一人で上高地に這入り、中尾峠を越して槍見温泉へ泊りました。それから翌日、クリヤ谷の長い登りを笠ヶ岳頂上迄頑張って、頂上小屋で寝ましたが、もう小屋番も居らず、僅かに残りの米と味噌のみで、久し振りに質素な昔の山旅を思ひ出しましたが、次の日は大変です。

先ず、笠頂上から、笠谷と言う飛弾の蒲田

街道へ下る谷を、それこそ嫌と言ふ位降って、街道迄出た処、高山行のバス最終が出て了つたので、上りバスで平湯へ行つた処、途中で

ガイドの大和由松に出逢って、船津屋と言ふ宿屋へ案内され、それから飲めや歌へやの大騒ぎで、とうとう高山出張の××と沈没してしまいましたよ。

山の湯の、うすら寒い夜気を浴びつつ、宿へ戻る情感には、何か甘いものがありました。貴君でも居たら、又「吹雪は止みて月は出でぬ……」朗々とやり出す事でしたらう。月下に、笠岳の悠久の姿が、印象的でした。かくて、次の日、今般のガソリン規制で最終となったバスで、安房を越へ、中の湯から松本經由帰京した次第で、仲々愉快な旅でした。

この冬は、国際情勢でどうなるか判りませ

んが、何とか好い山へ行き度いですね。今度は少し、アルバイトの寡い、プリミティブな方面へ参り度いと思つて居ります。

会社の方は、何日頃出ますか。此間社用で下阪しました。フロントビータ等々相変らずです。せいで御加養の上一日も早く御本復を祈ります。勿々」

昭和十八年三月二十二日付、西八丁堀で療養中の森川氏より、痔疾手術後豊中に下宿の船本宛

「お手紙有難く拝見しました。東京にも春が来て、柔かな雨が降ったり止んだりして居ます。

心配して居た身体の調子が案外元気な由、安心しました。併し、此の半ヶ年位は、なれば病人の気になって自重されたい。

さて、小生も序々に快方に向ひ、時々鎌倉の助さんの所へ出かけたりして居ます。彼も一時よりは充分良くなりました。夏には二人で「牛は牛連れ」と、高原へ行く話などして居ます。充分自重して必ず元の健康体になりませう。

久保君の住所判らぬので、大兄より宜しくお伝へ下さい。」

昭和十八年三月二十八日付、鎌倉七里ヶ

浜で療養中の小谷部氏より、豊中船本宛。

「拜復、一別以来御無沙汰して失礼。又過日はお便り貰ひばなしで、貴住所失念して失礼を重ねた次第御海容乞ふ。

貴兄の御健康心配してましたが、今や全く丈夫になられた由大慶至極です。酒と女には只々も御注意されたし。

愚生の病氣思ったよりも重症で、幾ら寝ても一向よくならず、悲観の體です。

旧馴染、表記湘南の地に改修の身を横たへて居ります。

森川は、時々遊びに来て呉れ、往年を偲び、共に脾肉之嘆に暮れて居ります。

この夏は、藝科高原か上高地か、然るべき山間に暑を避けて療養する積りです。出来たら会ひたい。

会社の方は、辞職する積りだったが、まだ休職期間延長出来るらしいので、この秋頃迄軽快したら再出馬の積りです。

では不順の折、一層御自愛乞う。久保によろしく。床上乱筆失礼。」

昭和十八年四月十七日付、七里ヶ浜の小

谷部氏より豊中の船本宛、葉書

「拜啓 バター一封早速御恵送に預り、洵に有難う。最近は当方、飯の量を殆ど半減され

て、日頃大食の僕などは、フーフー言つて居るので、全くバター等は大助かりです。

もう大分春めいて、気もそろのシーズンですが、一向はつきりしない病気で、不快です。然し、体は十六貫許りに肥つて来たから、もう一息でせう。

夏には、出来たら上高地あたり迄も思つてますが、如何なものでせうか。では又。」

昭和二十年六月七日付、房州茂原に疎開の森川氏より、結核のため郷里米沢に療

養中の船本宛。

「春の便りの返事が、大分遅れました。初夏の氣候にて、野も山も緑、東京は焦土と化すとも、大自然はそのままで。大兄には漸く

病勢好転の模様、大慶至極です。不思議なもので、此の病氣、よくなり出す

と、相当の事をして平気で、「不安定期」に於ては些かの事でも発熱し、否絶対摂生を守つて居て、日課通りの生活でも、悪化する事があるのですが、自分の過去を考へても、全く不思議な程です。

但し、今の無理は一朝にして元の黙阿弥に返り、如何しても下らぬ頑固な微熱になりま

す故、くれぐれも或る限度―此の限度が自分で分れば、既に此の病氣快復したとも云へると思ひますが―その限界を超えぬ範圍に自由

に大氣を呼吸して下さい。繰返しますが、必ず手放しの楽観大禁物です。「前車の覆轍にならぬ様」

さて、富士見の小谷部助さん、やはり一進一退にて、戦局の前途、自己の立場等につき、種々頭を悩まして居る模様、何とも言葉のか

け様もありませぬ。仮に戦局が好転しても、彼の心境必ずしも、明朗とはゆかぬと思ひます。静かに心を定め、来るべき時を待つ心が欲しい。昔の助さんを思ふと、残念です。

同じ通信の中で、小生の善処を望んで来ましたが、小生此の冬以来、漸く本格的体力の



小谷部全助君
昭和9年夏剣八峰にて
(望月)

向上を自覚し、現在、祖国の難局と微力との均衡点を考慮の結果、此の村に於て、労力不足の為不耕作の止むなきに至った水田二町歩一三町歩の耕作を、茂原（近隣町名）農学校上級学徒の勤労奉仕隊の援助により、計画し居ります。

学校当局、村農業会と云はず、實際恩恵を蒙るべき村自身の無理解は元より、農具、作業衣、牛馬、学徒の食料、寝具、宿舍、肥料、更には耕すべき土地そのものの選択、地代、地主との交渉等一つとして難問ならざるはなく、体力智力の限りを尽して来ました。

現在は、漸く各方面の理解を得、当初の計画の三分の一位に縮少し、些か時期遅れながら、先ず学校当局の全面的援助を獲得、曲りなりに、計画は進行しております。

小生宅も現在、学徒九名同宿、共に学び、共に耕すとゆかぬ迄も、往年の潤沢テント生活を思ひ出す様な生活です。

兎に角、此の二町なにかしかの田から、百俵のお米が生れ出れば、秋のお楽しみです。

田植が済む迄は多忙です。その頃、又詳しくお便りします。唯一言、此の頃の学徒の気風、規律を見ると、昔年の吾々自ら、恥しくなる位なものです。

話とは別ですが、噂

によると、近々此の辺り、老幼子女は強制立退を命ぜられ、山形、福島方面へ疎開になるかも知れぬとの事、小生老母及び妹親兄（一女）適当なる所へ、再び立

退かす必要あるかと考へ居ります。

小生は義勇隊に入っても残る考へながら、若し貴地に一間か二間で結構乍ら適当な貸家なり貸部屋なりあれば、幹旋お願ひしたく思ひ居ります。面倒乍ら、お願ひ迄。

うたた寝の標足さむし梅雨曇 森川生

昭和二十年六月二十五日付、富士見高原

小谷部氏より、米沢船本宛書。

「久し振りに元気なお便り懐しく拝見、極く初期の内に病勢を喰ひ止め得た事、御同慶の至りです。今後は、過度の無理と栄養不足に注意すれば萬全でせう。森川からも、例の水田二丁歩の耕作の便りあり、喜んで居る所です。

她が、小生と来ては、既に在職中、手放せぬ仕事の為、とことん迄病気を進行させて了って居た為、年又年と、チリ貧的に悪化を自覚して居ります。

今年も、ずっと有熱状態で過ごして来ましたが、もう斯うなると、理想的なカロリー食なども全然摂れず、今更安静にした処でどうなるものかと言ふ訳で、残った体力で、時に

菜園をいぢったり、鶏の世話などしたり、へボ薪を打ったりと言ふ生活です。

どうも小生には、病気のせいとか、貴兄のような建設的な楽観的な見方が出来ないのは淋しい話です。佐藤弘の経済地理や世界資源分布論などに大分影響されて居るのでせうかな。或は前職で資料調達に苦しんだせい。兎に角吾が困体は如何なる事態にも軟論の余地はなく、吾々も、最後迄やり抜くのみでせう。何れ、調子好い時に詳しくお便りします。

では、益々御自愛專一に。さようなら。」
昭和二十年八月二十九日付、富士見小谷部氏より、食料豊富な農村に転居方を勧めめた小生意見に対する返書

「残暑厳しい折、お変わりなきや。先日は大詔降下と入れ違いに貴信拝受、種々小生の現況改善の為御心配願つて、本当に有難く思つて居ます。

今後の降服で何もかも骨ぬきになつて了ひ、電灯はつく、疎開も不要等々、ガラリと状勢一転ですが、相も変らぬは食料事情ですね。僕も恥を忍べば、可成り顔も利く事と思ひま

すが、僕のささやかなプライドが許さない訳です。兎に角、自分で自分の処理がつかぬ様では仕方がない。くだばる以外にないと言ふのが僕の立て前です。

東京の拙宅も些少な家作も、運よく全部災害を免れて、拙宅は姉一家に貸して、又家作の管理も頼んで、小生一人、こうやってのん気に療養させて貰つて居る訳です。勿論小生の本拠は、東京の拙宅にあります。兎に角、この程度の生活なら、当分不安はないので、せめて晴耕雨読程度にでも、体を使える様にしたいのが念願です。昔日の超張切時代を思ふと、死んで了ひたいと思ふこともありませう。況して、未見込のない弱小国と惰した日本を考えると、消えて了ひたい気持になる事がありますよ。茂木さんみたいに、好きな山に消えやうなんて、真剣に考えた事も度々ですが、色々な身辺の事情を思ふと、さう云う訳にも行きませぬ。何れ、交通でも楽になつたら、気分転換に、何処か移らうかとも考へて居ます。何しろ、今後の見通しがつかないので、当分は静觀の外ないでせう。

兎に角、えらいことになった。こう云ふ際こそは、一層健康が欲しいですね。貴兄も大いに御自愛下さい。では又。

多分難かしいと思ひますが、秋まきはうれし草の種子、若し入手可能でしたら一合位お送り願へませんか。」

昭和二十年九月八日付、茂原の森川氏より船本宛
「久し振りに御元氣な手紙拝見、誠に嬉しく思ひます。

こちらにも、何時か秋になり、虫の音が日毎耳に近くなります。

戦勢一変の事、それから耳にする眼にする事々に唯然し、野辺に佇立し、青い空を見つめるばかりです。

激しい感情と暗黒の苦痛に挟まれて自転する自己、余りに輕薄な騒々しい世相の動き、言葉が、これ程役に立たなくなつた事は珍しい。併し、君の言はれる如く、昔のグルッペを固めて、其の中に、僅かに呼吸する場を見出さんとする事は、何より望ましい。新しい針葉樹の芽が出かかつて居る芽を伸ばそう。

徒らに「竹林の七賢人」の消極ではなく、十年後二十年後の日本の在り方を、確り頭に入れて、苦難を分ち、忠告し、喜びを共にして、一步一步前進して行く様な団結をつくりたいと思つて居ます。

前線帰りの飛行機乗りから、改めて山の美しき、気高さを話されております。ヒマラヤの山頂に日本の旗を立てる日を夢みた昔が懐かしい。併し、夢に終らせてはならないと、固く思います。

疎開家の事、全くお世話様でした。小谷部兄には、交通の便あれば、何れ訪ねてみる積りです。」

昭和二十年十一月二十二日付、富士見の小谷部氏より。

「拝復、御手紙拝誦、当方こそ御無沙汰、失敬しました。

お元気で何よりですね。当地は、毎日晴天勝ち、寒さはもう可成りで、降霜で真白です。妙な平和時代到来で、近頃、快々として楽しまずです。いっその事、爆弾で一思ひにやられて居た方が、サバサバしてよかつた様に

も思はれる此の頃の世情です。

実は不図したはづみで、昨十月初めに出した九度の高熱が、どうしたことか一向に下降せず、些かあわてて、付添をつけたり、絶対安静を試みて居ますが、今以て降らず、九度内外がこれで五十余日欠かきず続く事になり床食ひ、床糞、全くの重態になって了つた訳です。

最善はつくして居りますから、後は運命と云ふ処、何卒御心配なく。

再び回復出来たら、ゆっくりお便りします。匆々。」

助さんからの此の絶望的な手紙を買つた私は、何ら為す術もなく、ただ役にも立たない激励の返書を送るとともに、秋の収穫も終つてほつとして居るだろう森川氏宛に、助さんの文をそのまま写して詳細を知らせた。

その後、両氏からの便りは途絶え、私は病床の傍の神棚に掌を合わせ、ひたすら助さんの加護を神に祈っていた。

歳暮になって、思いがけない森川氏御母堂様からの封書を拝受。しかも「富士見にて

と書いてある。不審に思いながら封を切ると両氏の計報であった。

痛恨無念。何という悲しい運命であろう。ともに登り、ともに飲み遊んだ、私の僅かな登山譜の中で最も多く行をともし、生命をザイルにつないだ此の二人を、一時に喪うとは。呆然自失。私はそれから、ふたたび有熱状態に陥つた。

夜汽車の中で、いつもウィスキーをチビチビとやり交した助さん、焦げ茶のうすぎたない背広を改良した登山服を着て、いつも発車時刻間際に「よう」とやって来た森川氏。奥又白の雪洞に、森川氏と私が凍傷で閉じこもっていたときに、若し助さんが現われてくれなかつたら、私の生命はどうなっていたらう。助さんの病状の急迫を、若し私が森川氏に知らせなかつたら、森川氏はわざわざ富士見まで出かけなかつたのではないだろうか。いろんな想いが馳けめぐり、回想の糸は果てしなく伸びて止まるところを知らない。

年忌にあたって、助さん、森川氏の冥福を

祈る。

(一九七六・一一・三)